

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	落合 理恵子
論文題目	＜フェッラーラ牧人劇＞研究 ジラルディ＝チンツィオの『エグレ』から グァリーニの『忠実な牧人』まで		
(論文内容の要旨)			
<p>＜フェッラーラ牧人劇＞とは何か。この問いに答えることが本論文の目的である。表層的には、それは北イタリアの都市フェッラーラで、16世紀後半に創作・上演された一連の牧人劇であると答えることが可能だろう。しかしこうした牧人劇の作品群はフェッラーラという都市にしか存在せず、またそれらの作品は17世紀にヨーロッパ全域で生じる牧人劇ブームのきっかけにもなった。したがって、冒頭の問いに答えるためには、それら牧人劇群の通時的進化をたどるとともに、個々の作品に通底する特徴を明らかにする必要がある。</p> <p>論文は序論に続いて4章あり、その後に結論が加わる。</p> <p>序論では、先行研究をジャンル論と作品論とに分類しながら、前者においてフェッラーラ牧人劇が1970年代から80年代になってやっと一つの演劇ジャンルとして認められたこと、後者において『アミンタ』、『忠実な牧人』の二作品のみに研究が集中していることを指摘し、フェッラーラ牧人劇全体の総括的研究の必要性を訴えた。</p> <p>第1章では、フェッラーラという都市が演劇都市としての特質を備えており、それが牧人劇出現の条件であったと主張する。とりわけエステ家の君主たちによる古代ローマ喜劇の上演や同時代作家への支援が重要な役割を果たしたが、そうした状況がエステ家の財政的危機や喜劇と悲劇という旧来のジャンルの行き詰まりを経て、やがて＜第三の演劇＞を求める機運を生じさせた。</p> <p>第2章では、そうした機運の中、1545年にジラルディ＝チンツィオが『エグレ』を通じて行った古代サテュロス劇復興の試みは、単なる古代回帰ではなく新しい演劇の可能性を求めた試みであり、それが牧人劇誕生のきっかけとなったことを論じる。そこにおいては悲劇における神々でも喜劇における市民でもない、半神やニンフといった第三の登場人物たちが舞台に現れるのである。</p> <p>第3章では、このサテュロス劇復興に触発されてベッカーリが1554年に創作した『犠牲祭』をとりあげる。この作品は伝統的な神話には登場しないニンフたちを登場させ、恋の嘆きをモノログで語らせた点で非常に革新的であり、この作品において牧人劇というジャンルが誕生したと言えよう。ニンフたちと牧人が互いにモノログを繰り返すという牧人劇の二つの特徴が、この作品において決定づけられたのである。また牧人のモノログを基本とした比較的短い詩作品である＜エグログ＞というジャンルが当時流行していたが、『犠牲祭』は、＜エグログ＞が持っていた恋の嘆きを歌い上げるという特質を演劇的に発展させたとも言える。</p> <p>第4章では、ほとんどの牧人劇が舞台としている＜アルカディア＞という一種の桃源郷</p>			

の特徴を、古代のウェルギリウスを起点にしながらかにしながら明らかにする一方で、『狂乱のオルランド』などの詩作品で有名なタッソーが1573年に書いた『アミンタ』だけが舞台を<アルカディア>に設定していない点に注目する。この作品は、当時のフェッラーラの郊外と思われる場所に舞台を置くことで、宮廷や都市に対する批判的見地を示唆することで人気を博したと言えよう。

第5章では、牧人劇の中で最も有名な作品であり、また<フェッラーラ牧人劇>最後の作品でもある『忠実な牧人』をとりあげる。グアリーニによって1590年に創作されたこの作品は、作者自身が『悲喜劇論概要』で「悲劇と喜劇の愉しみの程よい調和」によって「非の打ちどころがない形式と節度を持つ」と主張する悲喜劇になっており、まさに本論文のはじめに確認した「第三の演劇」を求める機運に合致したものであった。この作品は、同時代人からも「悲劇の重々しさ」と「喜劇の滑稽さ」を併せ持つと評されていた。

以上のことより、次のような結論を導き出すことができる。

<フェッラーラ牧人劇>は、フェッラーラで16世紀後半に生じた、悲劇でも喜劇でもない「第三の演劇」を模索する運動の中から誕生した。ジラルディ=チンツィオの『エグレ』を先駆とし、『犠牲祭』、『アミンタ』など続々とフェッラーラにおいて初演された牧人劇では、ニンフや牧人から成る登場人物の構成に伝統からの進展が見られ、また悲劇的な事件の後、必ずハッピーエンドで終わるという悲喜劇的な性質を内包していた。そして作品群の最後を飾る『忠実な牧人』の作者グアリーニは、まさにその点に着目し、<牧人劇>を意識的に<牧人悲喜劇>へと変容させたのである。こうした特徴により、この作品は、イタリア国内だけでなくヨーロッパ各地で人気を博し、17世紀のヨーロッパに牧人劇ブームをもたらすことになった。すなわち<フェッラーラ牧人劇>とは、単なる作品群の呼称を超え、その誕生から変容、波及、ブームという一連のムーブメント、牧人・ニンフといった複合的な登場人物、モノローグと悲喜劇的筋書きといった表現形式・内容などの総体を表す概念なのである。

(論文審査の結果の要旨)

ヨーロッパ文学における重要なテーマの一つに「牧人」という人物像があるが、本論文は、その近代における一つの表現形態である「牧人劇」の起源を、16世紀後半に北イタリアの都市フェッラーラで起こった芸術運動ないし芸術現象に求め、詳細な作品分析や創作・上演状況の調査を行ったものである。

論文は序論に続いて4章あり、その後結論が加わるという構成を取っている。それぞれの部分のおおよその内容とその意義を順にまとめると以下のようなになる。

序論では、先行研究をジャンル論と作品論とに分類しながら、前者において「フェッラーラ牧人劇」が1970年代から80年代になってやっと一つの演劇ジャンルとして認められたこと、後者において『アミンタ』、『忠実な牧人』の二作品のみに研究が集中していることを指摘し、「フェッラーラ牧人劇」全体の総括的研究の必要性を訴えている。またイタリア語・フランス語・英語で書かれた研究書を十分に参照しており、説得力のある問題設定であると言える。

第1章では、フェッラーラの演劇都市としての特質を、とりわけエステ家の君主たちによる古代ローマ喜劇の上演や同時代作家への支援を中心に明らかにし、そうした状況がエステ家の財政的危機や悲劇・喜劇という旧来のジャンルの行き詰まりを経て、やがて「第三の演劇」を求める機運を生じさせていたとする。宮廷における上演記録や当時の演劇論を調査して、「フェッラーラ牧人劇」の基盤にある状況を明確にした章である。

第2章では、そうした機運の中、ジラルディ＝チンツィオが『エグレ』を通じて行った古代サテュロス劇復興の試みを、単なる古代回帰ではなく新しい演劇の可能性を求めた試みとし、それが牧人劇誕生のきっかけとなったと論じる。なぜならそこにおいては悲劇における神々でも喜劇における市民でもない、半神やニンフといった登場人物たちが舞台に現れており、その意味で、未だ完全とは言えないまでも、第1章で指摘した「第三の演劇」を求める機運に応えているからである。

第3章では、このサテュロス劇復興に触発されておよそ10年後にベッカーリが創作した『犠牲祭』をとりあげ、伝統的な神話においては存在しなかったニンフたちを登場させ、恋の嘆きをモノログで語らせるという点で革新的であったことを指摘し、この作品において牧人劇というジャンルが誕生したとしている。前章と本章では、作品の革新性を明らかにするために、作品の分析のみならず作者自身やその他の論者によって書かれた演劇論の分析を詳細に行うという手法が、とりわけ見事に生かされていると言えるだろう。

第4章では、ほとんどの牧人劇が舞台としている「アルカディア」という一種の桃源郷の特徴を、古代のウェルギリウスを起点にしながら明らかにする一方で、『狂乱のオルランド』などの詩作品で有名なタッソーが書いた『アミンタ』だけが舞台を「アルカディア」に設定していない点に注目している。当時のフェッラーラの郊外と思わ

れる場所に舞台を置くことで、宮廷や都市に対する批判的意見が示唆されているとした点は、文化史的にも非常に興味深い主張である。

第5章では、牧人劇の中で最も有名な作品であるグァリーニの『忠実な牧人』をとりあげている。この作品が同時代人からも「悲劇の重々しさ」と「喜劇の滑稽さ」を併せ持つとされ、まさに本論文のはじめに確認した「第三の演劇」を求める機運に合致したものであったことを、作者やその周辺における議論の調査や作品の分析に基づきながら明らかにしている。

以上のことより、著者は次のような結論を導き出している。フェッラーラで16世紀後半に生じた悲劇でも喜劇でもない「第三の演劇」を模索する運動の中から、一連の牧人劇が誕生したが、それらの作品にはニンフや牧人から成る登場人物の間に高貴・平俗という身分が混在し、また悲劇的な事件がハッピーエンドで終わるという悲喜劇的な性質も確認できる。それらの作品が17世紀のヨーロッパに牧人劇ブームをもたらすことになったのも、まさにそうした特徴からであった。すなわち〈フェッラーラ牧人劇〉とは、単なる作品群の呼称を超え、その誕生から変容、波及という一連の運動や、牧人・ニンフといった複合的な登場人物、モノログと悲喜劇的筋書きといった表現形式・内容などの総体を表す概念なのである。

はじめにも述べたように、イタリア本国を含め、こうした作品群を一貫した視点から捉え直し、そこに共通して存在した特徴を明確に輪郭づけた研究はこれまでなかった。本論文は、そうした点で国際的にも画期的な内容を持っているうえ、16世紀後半に北イタリアの一都市で起こった〈牧人劇〉の集中的創作・上演の過程を詳細に追いながら、後にヨーロッパ全域に広がる牧人劇のブームの起源をたどり、それらの作品群が持つヨーロッパ演劇史さらにはヨーロッパ文化史における意義を明らかにしており、その意味で本研究科の理念にふさわしい内容を備えたものと言うことができる。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値を持つと認める。また平成22年7月28日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降